

さ ざ ん か

第 102 号、2010 年 5 月

風薫る、という言葉がもっと似合う季節が 5 月だとおもいますが、今年の 5 月は動物達にとっては不吉な風に吹かれて大変です。宮崎県の口蹄疫問題を見ていると、大儀の前にはなんと多くの犠牲を払わなければならないのだろうか、その殺戮の数を聞くと本当にビビるというか、びっくりしてしまいます。別に何万頭も殺さなくてもいいのじゃないのか、などと。でも、詳しくは知りませんが多分そうすることが時間的、空間的に全体の利益を考えた場合にもっとも良いということなのでしょうから、あえて、「牛さん、豚さんかわいそー」などと幼児的発言は控えることにしましょう。それにしても、種牛の話など、考えようによっては何と人間と言うものは残酷なものなのだろうと思ったりもします。そもそも、遺伝子を操作して美味しい肉を作る、という発想そのものが恐ろしいものではありませんか。別にそこまでして（牛や豚の遺伝子を掛け合わせたりして）美味しい肉は食べなくてもいい、と思ったりもしますが、それを言い出すと植物から魚類からすべて遺伝子の掛け合わせそのものにより、立派な人間の英知の産物になっているものも全部否定しなければならなくなってしまいます。

現実的には、遺伝子操作は最悪人間にだけは適応して欲しくないと思いますが、実際に人間の精子バンクや卵子提供者の存在や受精卵の操作、代理母などの状況を見ていると、もう殆ど似た様な舞台に立ってしまっていると言えないこともなさそうです。

「いのち」とはなんなのだろうか。生き物が生き物を食べないと生きていけない世界の合理性と不合理性。「いのち」の有限性、あるいは存在の意義など色々な事を考えさせてくれている今回の口蹄疫ウイルス問題です。人間に当てはめて、仮に、将来致命的強毒ウイルスが出現した時、伊佐地区に 1 人感染者が出たら、残りの日本人全員の感染予防のため伊佐の人間は全員殺処分！などと恐ろしいことにならないよう願っていきましょう。

ああ、これって、想像しただけで、恐ろしいことですねえ。

===== 俳句 ===== 西屋敷喜美子

返礼を 配る盆地の 若葉風

一言に 泣けとばかりに 走り梅雨

夏立ちぬ 便りなきこと 良しとする

県立北薩病院の理念

慈愛・協調・前進

県立北薩病院の基本方針

- 1 患者さんの満足、ご家族の安心を提供します
 - 2 急性期医療の実践と、より高い専門医療を追求します
 - 3 地域の医療、福祉との連携を強め、これを支援します
 - 4 仕事を通して喜びと生き甲斐を追求します
-
-

病院からのお知らせ

- * 7月から当院はDPC対象病院となり入院、外来のシステムが若干変わります。病院生き残りのための当院の選択です。概略、説明は次号に掲載する予定です。
- * 新型インフルエンザワクチンはほぼ今回は終息したようです。多分、これから先もずっとウイルスとの戦いは続きます。今回の新型インフルエンザ対策が良い教訓になればと思います。
- * 病院内では、全ての方にマスク着用をお願いしていましたが、とりあえず4月から義務付けは解除いたしました。可能な方はマスク着用を継続下さい。
- * 骨密度、測ってられましたか？ご希望の方はいつでもできますので、各科窓口でおたずねください。適切な治療で骨粗しょう症の進行を予防できることがあります。骨密度を上げるお薬を服用している方は、骨密度が上昇したかどうか確認してみてもいかがでしょうか。骨折予防は寝たきり予防につながります。骨年齢：あなたの骨は〇〇歳です。という表示が出ます。
- * MRIで脳の検査をしてみませんか？目的は脳卒中や認知症（ボケ）の予防につながるからです。また、脳動脈瘤（くも膜下出血の原因となる）の発見にも威力を発揮します。脳ドック以外でも脳神経外科または神経内科外来にてご相談ください。無症候性の病変（症状はないけど梗塞がある）がみつかると予防の治療を開始した方もおられます。寝たきりや認知症にならないためにも一度は検査されることをお勧めい

たします。

- * MRI は腰痛の検査にも威力を発揮します（脊柱管狭窄症、椎間板ヘルニアなど）。あるいは肩こりや手のしびれの原因を探すのにも有用です。精密検査希望の方は神経内科外来にてご相談下さい。
- * 新式のマンモグラフィーが導入されております。乳がん検査に威力を発揮いたします。近年乳がんが増加傾向です。乳がんが気になる方は外科外来へお申し出ください。

短歌

瀬戸好子

雨音に 瞼閉じれば 海の色 広がりにてゆく 眠りの中に

二部屋を 隔てても なを聞こえ来る 難聴の夫 テレビ見るらし

自然の生き方

別府正隆

県立自然公園蘭牟田池湖畔から約3キロ離れた養護老人ホームの近くに、妻と2人高台に生活（くら）している。今年はずらしく4月とは云え、寒風の酷しい日々が続いている。冬物の衣類もクリーニングに出して、一旦は筆筒の中へと整理したはずなのに、今日も冷たく寒い。冬物を取り出して、妻と2人、飲物やおやつを準備して蘭牟田池に出かけた。池の辺（ほとり）にはカモメの群れがあり、周囲の木々もゆれていた。

時折、冷たい風波のためか、カモメも気持ちよさそうに揺れている姿を見て、妻と語り合った。鳥たちの世界はいいなあ・・・妻が言った。鳥たちだって私達と同じでしょう。鳥の中にも、気の強いもの、弱いもの、中にボスだっていると思う。そんな話をしながら、寒いのを忘れて約一時間、池の辺のベンチで過ごした。カモメの姿をじっと眺めながら、なんと素晴らしい光景だろう。時折、つがいなのか二羽で仲良くしている様は実に美しいとも思った。因みに、自分たちもそうありたいものだとも思った。若くはないのだ。残された人生を精一杯楽しく、悔いのないようつとめたいものです。

みんな元気でやりませう

宮園 辰夫

今お年寄りや介護をしていらっしゃる方、ボランティアをされている人、少しでも参考になれば幸いです。

皆さん、くれぐれも階段なんか、転んだりしないようにして下さい。転んで骨折でもしたら、年取ってから、なかなか治らない。治っても暇がかかるし、何か調子が狂ってくる。もし一回転んだら、二度と転ばない様にしませう。二回転ばない様にする方法はあるんです。それは一回転んだらもう起きなければ良いのです。参考になりません。けど、これが秘訣ですかね。

自分の健康は自分で管理する。難しいですね。ハンディのない人はちょっと手を貸してもらえと、ハンディのある人は嬉しい。でも、自分で車いすを動かせる人には、余り手を貸さないで、自分でやらせることが大切。どうしてもと、云う時には手を貸してあげると、それは嬉しい。それが介護であり、ボランティアかも。

人を幸せにするには、自分が健康でなければいけない。みんな年寄りには歴史があり、人生の大先輩であると何度が聞いたことがあるが、思い出せないが、それはお年寄りが1人亡くなると、図書館や施設が一軒くらい喪失したとと変わらない、という。年寄りは知恵の塊だから、その位大切なものだと聞いたことがある。

今介護学校では年寄りはこうすれば喜ぶ、こうすれば嫌がると云う様に若い女の子には教えている。それというのも、今の若い子は皆年寄りといっしょに住んでいないから、お年寄りとどのように接して良いか分からない。介護福祉士になってもお年寄りの気持ちが分かる筈がない。昔の人は学校はなかったけれど、何で上手に出来るか。介護は技術じゃない。心がないと出来ない。昔の人は学校はなくても気持ちが伝わっているから、全部同じようには出来ないけれども、世の中も変わっているし、相手を良く見て頑張ろう。意味のない文章で済みません。

胃カメラの 動きをかすかに 覚えつつ 画像に見入る ベッドの上で
手信号で 導きくるる 若者に 頭さげつつ もみじマークも安心

あと一句 作りあぐねて 星月夜
年金の つましきたつき 鯛焼く

爪と髪オールカラーで染めたくっ
子い説教ついで亭主ずい叱られっ

ニッポンはニッポンを超えられるか パート2 カラーマン

ニッポンはニッポンを超えられるか。そんなことは分からない。分からないが、私は超えられると思うのである。なにゆえか。いや、或る側面からはすでにニッポンはニッポンを超えているといえるのである。

現在の長寿社会は、これまでのどのニッポンを遥かに超えていて幸せであろう。もちろん、昨今言われる将来への不安（とはいえ、80歳過ぎて将来の不安も何もあったもんじゃあないだろう、とは暴言になるか？）は、孤独死とか、老々介護とか、あるいは医療保

険、介護保険料の支払いの問題とか、地域での限界集落の問題などであるが、世界一の平均寿命と云う大きな宝を得るためには、ある程度はやむを得ない代償ではないだろうか。

昔、人生50年だった頃、50才を過ぎれば翁と呼ばれていたそう。いまは、50才を過ぎてから更に30年近くの人生がある。昔から比べたら今は人生が2度あるようなものだ。一度、死んだと思えば何でもできる。怖いものもない。

井上陽水のように、「人生が2度あれば！」などと嘆く必要はないのだ。実際にやり方次第、考え方次第では2度あるのだから。

仕事を終え、子育てを終え、社会に対する最低の義務を終え、あとは、自由気儘な人生が待っている。(はずなのである。理屈では)

かつて、「老人力」という言葉が流行ったことがあるのをご存知の方も多いと思う。いままならさしずめ「新老人力」と云ってもいいだろうか。体力と気力と金力の続く限り、好きな生き方ができる時代なのだ。将来を憂う必要もない。だって、もう2,30年しか寿命がないのだし、死んだ後の世の中なんて知ったことじゃないのだから。

今の団塊の世代より古い人間にとっては、今のニッポンは過去のニッポンを超えているといっても良さそうである。

問題は、もう先の長くないオッサン、オバサン達にとってはそうかもしれないが、若い世代にとってはどうだろうかということだ。彼らにとっても、ニッポンはニッポンを超えることができるのだろうか。

縮小する経済、伸びないGDP、増える財政赤字、1000万人を超える年収200万円以下の貧しい人々。「食べるだけの収入があれば、あくせく働かなくても人生を楽しんだ方が良い」という、ちょっと簡単には崩せそうもない低空安定価値観の蔓延。豊かになりすぎて飽和しかけた欲望。本当の飢えとか貧乏を知らない人間達に、言葉で貧乏は大変なんだぞ、といっても理解はしてもらえない。

おそらく、貧乏の基準が違う。インスタント食品、コンビニ弁当しか食べないことも貧乏暮らしに含まれるらしい。少なくともこれらを購入するだけの収入があることは前提であるのだ。これまでの世代の稼ぎがあるから、その前提が成り立っているに過ぎない、ということに気がついていない。今の豊かさは自分たちで獲得したものではなく、親の世代が豊かさを目指して必死で働いてきた結果の豊かさなのである。生まれた時から豊かな社会に育った彼らにとって、クルマとか、テレビとかエアコンとかゲームとかCDとかDVDなどは、新しく獲得するものではなかつたのだから、当然欲望の対象としてそれらを欲しがらる必要はなかつたのである。

昔、家族揃って自家用車でドライブに出かけることはなかった。そもそも、自家用車がなかった。したがって、いつかクルマを買って、家族団らんの時間を過ごしたいと強く願った。右肩上がりの社会の中では、クルマも当初の4人乗りのファミリーカーにかわり、ワンボックスカーと呼ばれる7人乗り、8人乗りの大きな車が登場した。そんなに喜びもしない子供達を乗せて、遠出をすることは実は子供達のためと云うよりも親の満足感を満たすためであった。

ロックフェラービルやマンハッタンのビルを節操なく買い漁り、ジャパニアズナンバーワンと言われた時代も、今振り返るとウソみたいなバブルの時代も過ぎさった。株価が4万円になろうとしていたこともあったのだ。

そういう経済的側面からはニッポンはもうニッポンを超えることはないのではなかろうか。バブルとか欲望資本主義とか永久不滅の右肩上がりの経済神話は、昔、われわれの祖先が憧れていたお隣の国に任せておけばよいであろう。かつて日本が得たもの以上を得ている一方で、ニッポンが失った多くのもの以上を失おうとしている中国に。

ニッポンがニッポンを超えるためには、これまでのパラダイムを変えないと無理だと言うことになる。そもそも、越えるということはどういうことか。まあ、それはこれまでよりも幸福なる、という意味と解してよいであろう。

振り返ると、明治以降の日本の発展は一言でいうとその政策は富国強兵であった。そして、ニッポン国はその理想どおり世界の5大強国になり、強力な軍隊をもち政策としての富国強兵は成功したといえるだろう。たまたま、行き着く先が、運悪く大東亜戦争での敗戦というカタチにはなったが、目的としたところにはほぼ達したと評価できるのではないだろうか。開国以来の悲願である、尊皇攘夷は見事に、しかも世界規模で試みることができたと言える。天皇陛下の御許、鬼畜米英を蹴散らそうとしたのだ。

世の中、結果がすべてである、とも言える。終わり良ければすべて良し。しかし、明治の開国以来のやり方の真似では、明治以降のニッポンを超えることは出来ないであろう。

江戸時代に戻ることは実質不可能である。しかし、これまでのニッポンを超えるためには中央集権、富国強兵とは異なるやり方をやってみる必要はあるだろう。

めっきり評判を落としている民主党政権。しかし、少なくとも、数少ない期待が持てる政策として地方分権というカタチは試みる価値があるのではないだろうか。田舎が栄えないと、けっきょく都市も栄えないのである。初めに都市ありき、ではなく初めに地方ありき、なのである。人材も、モノの材料すべて地方が供給してのち、都市で使われて始めて富に変換されたのである。

地方再生の鍵は、偏に第一次産業にかかっている。農業、畜産業、漁業、林業などである。世界に類を見ない、豊かなモンスーン地帯にあるニッポン列島。東京と新潟くらいの近い距離で、こんなに気候が異なるところはそうそうないであろう。トンネルを越えると雪国だったなんてなんてステキなファンタジーなのであろうか。

農業は成長産業なのだとは世界の常識らしい。(日本は世界5位の農業大国、大嘘だらけの食糧自給率：湯川芳裕、講談社+α新書)

子供が継げる職業としての農林水産業を確立することが地方再生の第一歩である。もう、企業誘致でおこぼれを貰う発想は止めないとだめなのだ。ニッポン国は砂漠ではないのだ。森林も、水田も畑も、豊かな海岸線も、暑いところも寒いところも、高いところも低いところも、広いところも狭いところも、すべてあるのだ。沢山の豊かな自然を与えられたニッポン列島。鉱物資源こそない(とは必ずしもいいきれないけれど)、その他の自然は十分あるのだ。

ニッポンは多分ニッポンを超えることが出来であろうと思う。なぜならばニッポン人は賢いからである。柔軟性があるからである。誇りもある。情けもある。知恵もある。

唯一足りないのは、カリスマ的なリーダーシップをとりうるニッポン人の存在であろうか。(だったら、当面素晴らし指導者は出そうにないから、いましばらくは日本人は烏合の衆、アホの集まりのままだわね！ああ、やっと最期にあたしの出番があったわ。良かったわあ、とつぶやくカラーマンのオンナでした。)

肺癌の 父と仰ぎ見る 五月晴れ

輝ける 君の横顔 五月晴れ

編集後記

世の中に平穏ということはないのかもしれませんがね。グローバル化する前の世界であれば、我が周囲は平穏無事、ということも可能だったのでしょうが、ギリシアの経済危機にしても、口蹄疫ウイルスにしても、新型インフルエンザもそうでしたし、もう世界とは不可分の関係性を結んでしまっているのだと実感します。多分、これからも、戦争とかテロとか、感染症とか不況とか、自分だけ良ければいいやという知らんぷりは出来ないと感じなければならぬと思います。それだからこそ、逆に、世界と対比する個人もこれまで以上に大事にしたいなと思ったりもしますよね。(KT)